全酪連会報 8

2019 AUG No.647

ZENRAKUREN

酪農とのかけはし／
増田一真さん

第70年度（令和元年度）
通常総会開催される 前編

父の日に牛乳（ちち）を贈ろう! 後編

第48回 全国酪農青年女性
酪農発表大会❶

購買生産指導部だより／
ニューヨーク州出張報告

酪農部だより／北福岡工場紹介

人事異動

酪農トピックス／
北海道酪青女が取り組む「食育」を
高校生がインタビュー!（札幌）ほか

日本酪農見て歩紀／
Misomi牧場 福井県若狭町

カーフトップ ラインナップ

www.zenrakuren.or.jp/business/kobai/calftop/

全国酪農業協同組合連合会

平成29年5月号の本報「日本酪農見て歩紀」にてご紹介しました増田牧場に再度訪問させていただきました。今回は、今年度より経営移譲されたばかりの一真さん（34歳）にお話を伺いました。

就農の決め手は奥様の一言

一真さんは小学生の時に先生に勧められたことがきっかけで陸上の道に進み、大学まで短距離・幅跳びの選手として活躍されました。大学ご卒業後、体育教員を3年間勤められ、その後平成24年にご実家に戻り就農されました。

「姉と妹がいますが一人息子なので、両親の就農への期待はありました。でも陸上という楽しみを見つけ、それに挑戦していくことを両親はずっと応援してくれました。就職後、「いつかは実家を継ごうかな」と考えるようになりましたが、なかなか思いが固まりませんでした。今考えると逃げていたのかもしれないですね。就農を決意したのは、サラリーマン家庭出身の妻が「どうして酪農を継がないの！」と意思表示をしてくれたことです。家族が理解を示してくれたことが大きく背中を押してくれました。それと、就農を決めた当時は酪農家にとって厳しい時期であったにもかかわらず、実家は健全経営を続け大きな負債もなかったことが、家族で就農する僕には安心材料でした。」

増田一真さんとご家族

共進会で理想の牛を追求するのが楽しみ

その後豊頃町での1年間の実習の後就農されましたが、酪農に関しては初心者であったため、ご両親に限らず牧場を訪れる獣医さん、授精師さんを先生に基礎から勉強されました。お父様の慶一さんは共進会に熱心に取り組まれてきましたが、それについても強要はされませんでした。そのため就農時はさほど興味を持たなかった一真さんですが、現在はのめりこんでいるそうです。事務所内にも授賞した牛たちの写真がたくさん飾られていました。

「ショウには全然興味がありませんでした。ただ周囲の農家が熱心に取り組んでいて同志会に誘われたので、最初はあまり気乗りしませんでしたが通っていました（笑）。徐々に自分の牛が良い成績や賞をもらうようになり、楽しくなりました。今は交配を考えているときから楽しいです。どんなに計算して交配をしても、失敗することもあります。受精卵を移植することもありますよ。

今回は、**北海道阿寒郡鶴居村 インクリースフィールド増田牧場**の後継者**増田 一真**さんにお話を伺いました。

ただ共進会の目的は長命連産で長持ちする牛をそろえて経営を良くすることで、勝つことが目的ではないと理解して取り組んでいます。海外の優秀な血統を取り入れたり、良い血液を残していくことで将来的に足腰の強い理想的な牛群ができあがります。そういう意味では「模範的な牛を追求していくこと」なので、もっと評価されても良いと思っています。我が家では牛群審査を受けていて、指標をつけて良い牛の血統を残しています。おかげで10歳以上の牛も数頭いますよ。長生きしてくれれば余った牛を売ることもできるし、経営に跳ね返ってきます。」

目指すのは手を掛けながらもゆとりある酪農

増田牧場の牛舎は平成28年9月に新築された80頭の対尻式つなぎ牛舎です。

屋根の高い迫力ある牛舎には、視察で訪れたカナダの農場をイメージしたと言う赤・白・紺を基調としたカラーに、お姉様ご夫婦がデザインされたマークが大きく描かれています。

当初はご両親の引退も考え、労働力を補う搾乳ロボットの設置を検討していましたが、最終的にはつなぎ牛舎を選択されました。

「ロボットに比べれば労力

牛舎全景、鮮やかな外観で目を引く

若手後継者の本音 Vol.39

牛も人も快適な牛舎で一元君もお手伝い

給餌はロボット、搾乳は人がそれぞれ手をかける

［経営概況］
所　　属　釧路丹頂農業協同組合（武藤清隆代表理事組合長）
家族構成　増田一真さん、ゆみさん、長女の咲空ちゃんと長男の一元くん
　　ご両親の慶一さん、久子さん
飼養頭数　経産牛110頭　育成牛80頭　預託育成牛50頭

楽しみを見つけて やりがいのある酪農を！

はかかるけれど、人間が管理して牛乳を搾ったほうが事故も少なく、牛が長持ちする。コスト面でも大きく違うことから自分の経営にはつなぎ牛舎が合っていると考えました。結果的に、とても満足しています。餌を食べていない、痩せてきたなど牛の状態もすぐに分かるし、それらを獣医さんや授精師さんに伝えるのも楽です。それと自動給餌機の存在も決め手になりました。特に我が家の機械㈱ピュアライン ロビベック自動給餌ロボット）は、ストッカーにサイレージを投入しておけば1頭ずつ1日6回給餌をしてくれるので、以前に比べて大きな作業軽減となりました。

今は両親と僕で作業を行っていますが、将来的に両親が引退しても従業員が1名いれば回る経営になっています。牛も人も無理をしない、ゆとりのある酪農を目指しています。

以前取材を受けた時には12，000kgの乳量を目指していましたが、今では乳量よりも丈夫で長生きしてもらうことを重要視しています。」

後輩への厳しく優しいメッセージ

一真さんは現在コーチとして地元小学生に陸上を教えています。奥様のゆみさんは同じ釧路出身ではありますが、酪農家となられてから農協女性部などで地域との交流を深め、今では若手女性部の幌呂地区の会長をされているそうです。周囲に同じ年代の酪農家が集まっていることから家族ぐるみで仲良くされているとのこと、「良い仲間に恵まれた」と一真さんは話されていました。多くの仲間とともに新しい経営主となられた一真さんですが、実はご両親には小学校の時から厳しく育てられたそうです。「辛いのは仕方がない、目標があるんでしょ！」と陸上の練習もスパルタだったとか。そんなご両親の教育を受け止め育ってきた一真さんの「若手後継者への一言」は厳しいながら鋭いものでした。

「就農するとき、実家は健全経営ではあったものの情勢は良くありませんでした。なので就農当時からどうすれば儲かるか、どこを改善すれば良いかと常に考えてきました。今では自分の酪農を見つけることができ、楽しみや目標もあるのでやりがいがあります。陸上でも同じですがスタートが辛いほうが伸びると思います。

今は乳価も個体も高く酪農は儲かりますが、それに流されてはいけないと思います。これから就農する方には最初に美味しい思いをせず一生懸命やってもらいたい。上から目線で言えば「中途半端な気持ちでやるなよ！」です。・・でもそんなこと言ったら「おまえだよ！」って言われちゃうかな（笑）」

全国の若手後継者の皆さんへ 一言！

毎日の仕事、大変な面もありますが、目標を持って一緒にがんばりましょう！

小さいお子さんを持つお父さんへ

速く走るのにはコツがあります。お子さんの気持ちがあれば、練習させてあげると運動会が楽しみになりますよ♪

第70年度（令和元年度）

通常総会開催される

前編

本会は、7月25日㈭13時より、TKPガーデンシティ品川（東京都港区高輪）において、第70年度通常総会を開催し、平成30年度の事業実績、剰余金処分案及び令和元年度の事業計画案の承認を得るとともに、役員の補選を諮りました。

本総会には来賓として、農林水産省生産局畜産部・渡邊毅部長、農林中央金庫・岩曽聡 常務執行役員をはじめとして、公益社団法人中央畜産会、一般社団法人中央酪農会議、一般社団法人全国酪農協会等、関係団体から多数のご臨席をいただきました。

総会は、朝日修氏（岐阜県酪農農業協同組合連合会 代表理事会長）を議長に選出して議事に入り、いずれの議案も賛成多数で原案どおり承認されました。

また、第7号議案「役員選任の件」において、役員の補選を行い、新たに役員を選任しました。なお、本総会後の理事会において、副会長理事に隈部洋氏が選任されました。

※詳細につきましては、次回9月号に掲載いたします。

平成30年度事業実績及び令和元年度事業計画

（単位：百万円）

科　目	平成30年度実績 ①	令和元年度計画 ②	②/①対比
酪農事業（取扱金額）	9,149	9,236	101%
購買事業（取扱金額）	74,373	76,003	102%
総取扱金額	83,522	85,239	102%
事業総利益	11,139	10,942	98%
販売費用	7,289	7,772	107%
事業管理費	2,883	2,974	103%
事業利益	967	196	20%
事業外収益	1,070	1,041	97%
事業外費用	637	717	113%
経常利益	1,401	519	37%
特別利益	52	1	2%
特別損失	94	109	116%
税引前当期利益	1,359	412	30%

※科目ごとの金額について、百万円単位未満を四捨五入した数値を表記しているため、下限数値が合致しない場合がある。

新役員紹介

～副会長理事に隈部氏が選任～

本通常総会において役員の補選が行われ、下記のとおり新役員が選任されました。

●副会長理事
隈部　洋
熊本県酪農業協同組合連合会
非常勤

●理事
鈴木　康弘
愛知県酪農農業協同組合
非常勤／新任

●理事
西川　寛稔
中春別農業協同組合
非常勤／新任

父の日に牛乳を贈ろう！ 後編

今年も全国各地キャンペーンを実施！

全国酪農青年女性会議による「父の日に牛乳を贈ろう！キャンペーン」が、今年も全国各地で開催されました。今年は４月末～父の日である6月16日㈰を中心に、各地域において特色のある活動を全国で展開しました。

今月号では、各地で実施されたキャンペーンの一部をご紹介します。

岩手県

●岩中酪青年女性会議

開催日：６月２日㈰（岩手県歯科医師会館）

内　容：酪青女会員やその子女が参加して、消費者に牛乳・ミルメーク・リーフレットなどを配布、牛乳消費拡大をアピールしました。また、歯を丈夫に大切にの「8020運動」にも協賛しました。

福島県

●福島県酪農青年研究連盟

開催日：６月29日㈯
（会津美里町立高田小学校）

内　容：２年生の96名を対象にしてバター作り体験などを実施し、ミルメークを配布して牛乳の大切さを理解してもらいました。

山形県

●山形県酪農青年女性会議

開催日：６月29日㈯
（山形県酪農協置賜支所 特設会場）

内　容：ミルクランドモウモウフェスティバル（乳牛共進会含む）で消費者と交流し、牛乳・乳製品のPRを行うとともにミルメークを配布しました。

茨城県

●茨城県酪農青年女性会議

茨城県酪農青年女性会議は、４月29日㈪「いばキャラ祭り2019 inイオンタウン水戸南」に牛の着ぐるみで参加し、キャンペーングッズを配布して、PR活動を展開しました。

栃木県

●栃木県酪農青年女性会議

栃木県酪農青年女性会議は、５月29日㈬県知事・農政部長を表敬訪問し、県産牛乳を贈呈し、牛乳消費拡大活動への協力を依頼しました。

栃木県酪農青年女性会議は、6月2日㈰県内の道の駅など7ケ所で、一斉に父の日キャンペーンのPR活動を展開しました。県産牛乳の試飲会やキャンペーングッズを配布し消費拡大を呼びかけました。

栃木県酪農青年女性会議は、6月15日㈯県主催のイベントに参加し、牛乳の試飲、キャンペーングッズを配布し、栃木県牛乳普及協会と協力してPR活動を行いました。

埼玉県

●埼玉酪農業協同組合

埼玉酪農業協同組合は、６月８日㈯に開催された埼玉県深谷市「道の駅はなぞの」で、『父の日に牛乳（ちち）を贈ろう！』のPR活動を婦人部が中心となって行いました。

当日は曇り気味の天気でしたが、来客400名にメッセージカード付ミルメークを手渡し、キャンペーングッズを配布し、牛乳の効能を紹介し、消費向上に資する宣伝活動を行いました。

長野県

●長野県酪農青年女性会議

長野県酪農青年女性会議は、５月26日㈰美ヶ原高原牧場にて開催された放牧祭において、キャンペーングッズを配布しPR活動を行いました。

新潟県

●新潟みらい農業協同組合

新潟みらい農業協同組合は、６月23日㈰、農産物直売所「いっぺこ～と」において、キャンペーングッズを配布しＰＲ活動を行いました。

長崎県

●長崎県酪農青年女性会議・長崎県酪農業協同組合連合会

開催日：6月5日㈬（長崎県庁）
内　容：知事、農林部長、畜産課長への牛乳・乳製品の贈呈、一般来庁者並びに県職員への牛乳試飲（400杯）、ツール配布（400部）

▲ 長崎県庁へ牛乳・乳製品の贈呈

●長崎県酪農青年女性会議

開催日：6月15日㈯（諫早農高）
内　容：近隣保育園児への理解醸成活動。牛乳等配布（100杯）、ツール配布（100部）

▲ 近隣保育園児への理解醸成活動

開催日：6月16日㈰（小浜温泉街）
内　容：観光客に対しての理解醸成活動。牛乳等配布（100杯）、ツール配布（100部）

沖縄県

●沖縄県酪農青年女性部連絡協議会

開催日：6月10日㈪（イオン南風原店）
内　容：似顔絵コーナー、牛乳・ソフトクリーム無料試飲

開催日：6月11日㈫（沖縄県庁）
内　容：沖縄県副知事へ県産牛乳・ミルク杏仁豆腐の贈呈

▲▶ 沖縄県副知事へ県産牛乳・ミルク杏仁豆腐の贈呈

鹿児島県

●大隅支所青年女性会議

開催日：6月6日㈭（鹿屋市役所）
内　容：市長へ牛乳・乳製品の贈呈、一般来庁者・職員への試飲（15ℓ）ツール配布（ミルメーク×150）

●鹿児島県青壮年女性会議

開催日：6月12日㈬（鹿児島県庁）
内　容：県知事、農政部長・次長へ牛乳・乳製品の贈呈

▲ 県知事へ牛乳・乳製品の贈呈

●本所青壮年部・女性部

開催日：6月11日㈫（桜ヶ丘保育園）
内　容：子牛との触れ合い体験、バター作り体験、ツール配布、似顔絵作成等（ミルメーク×150）

●志布志支所青年部女性部・曽於市酪農振興会

開催日：6月14日㈮（道の駅末吉）
内　容：来客者への牛乳試飲・ツール配布（ミルメーク×200）

●種子島支所青年部・女性部

開催日：6月14日㈮（種子島 西之表市）
内　容：市長へ牛乳・乳製品の贈呈

開催日：6月14日㈮（種子島 南種子町）
内　容：町長へ牛乳・乳製品の贈呈

開催日：6月14日㈮（種子島 中種子町）
内　容：町長へ牛乳・乳製品の贈呈
※町長不在で副町長対応

●霧島市酪農振興会女性部

開催日：6月14日㈮（霧島市役所）
内　容：市長へ牛乳・乳製品の贈呈、一般来庁者・職員への試飲（15ℓ）ツール配布（ミルメーク×200）

▲ 霧島市長へ牛乳・乳製品の贈呈

第48回 全国酪農青年女性酪農発表大会 ❶

酪農経営発表の部

農事組合法人霧島第一牧場
池田 雄太さん（九州会議）が**農林水産大臣賞**を受賞!!
千葉 澄子さん（北海道会議）が**審査員長特別賞**を受賞!!

7月11日㈭～12日㈮の両日、鹿児島県鹿児島市「城山ホテル鹿児島」において全国の酪農生産者および関係者約550人が参集し、「第48回全国酪農青年女性酪農発表大会」が開催されました。

森監事による開会宣言、池田副委員長による綱領唱和に続き、主催者を代表し、最初に小森委員長より「18年に頻発した自然災害や改正畜安法の施行、TPP11と日EU・EPAの発効、日米TAG交渉がスタートするなど、酪農生産現場を取り巻く様々な厳しい要因を挙げ「先行きに不安を感じている酪友も多い」と述べた一方、4月からの飲用乳価値上げについては「酪農家と関係団体の協力の賜物。生産者の不安を全て払拭するものでもないが、小さな光明ではある。これを大きな希望に変えることは、我々一人ひとりの手にかかっている」と挨拶がありました。

▲ 小森委員長

続いて、本会砂金会長より、「全国各地から大勢の酪友にご参集いただき、全国酪農青年女性会議とともに、第48回全国酪農青年女性酪農発表大会を、ここに開催できる事を、大変うれしく思う。また、大変ご多忙の中、農林水産省や、地元鹿児島県をはじめ、多数のご来賓の方々にご臨席を賜り、厚く御礼申し上げます。さて、我が国の酪農は都府県を中心に、酪農家戸数は減少が続いている状況で、乳用牛頭数が久々に増頭に転じ、生産基盤回復に向けて明るい兆しが見えてきました。我々は、この兆しを確実にとらえながら、時代を担う後継者や新規就農を志す若者が希望をもって経営ができるような環境作りに尽力していかなければならないと思っています。そのことが、我が国酪農の生産基盤をより強固なものとし、国民に安全安心な国産牛乳を供給することにつながると信じています。

▲ 砂金会長

今大会で発表する12名の発表者の皆様は、そのすばらしい経営内容や意見・体験を存分にお聴かせ願い、会場の皆様には、本日の発表内容をぜひ自身の経営に役立てて頂くとともに、日頃会う事がかなわない全国の酪友達と、大いに

語り合い、お互いの絆を深めて頂きたいと思う。」と挨拶がありました。

続いて、ご来賓として、最初に農林水産省生産局 畜産部畜産企画課課長補佐 今崎裕一氏より祝辞を頂きました。「最近の我が国酪農をめぐる情勢をみると、牛乳の消費については、4月に価格の値上げが行われ、当初は消費の落ち込みが心配されていたが、現在までのところ需要は堅調に推移しています。Jミルクの需給見通しによると、今年度の生乳生産量は、北海道では、前年を上回る見通しであり、全国でも前年を上回り、2015年以来4年ぶりの増産となる見通しとなっています。また、今月公表された畜産統計によると、平成31年2月時点において、乳用牛の総飼養頭数は、前年から約4千頭増加の1,332千頭となり2年連続の増加となりました。特に、2歳未満の未経産牛頭数は、北海道、都府県ともに前年度を上回って推移しており、乳用後継牛の確保に向けた関係者の皆様のご尽力により、明るい兆しが見えてきたと感じています。農林水産省としても、この流れが確固たるものとなるよう、引続き酪農の生産基盤強化を図ってまいりたいと考えています。一方、国際情勢につきましては、昨年12月30日にTPP11協定が、本年2月1日には日EU・EPAが発効し、我が国を取り巻く国際環境は、新たな段階を迎えています。農林水産省といたしましては、意欲ある生産者の皆様が安心して経営に取組み、将来にわたって健全かつ持続的な畜産経営を展開していただくために、引続き「総合的なTPP等関連政策大綱」に基づく体質強化と経営安定のための対策を措置しています。さらには、来年の東京オリンピック・パラリンピックを、将来にわたって国産畜産物の需要を安定的に確保する上で重要なチャンスととらえ、輸出促進に向けて政府一体となって取組んでまいります。本年度は、酪農及び肉用牛生産の近代化を図るための基本方針の見直しを検討することとしており、そのため、食料・農業・農村政策審議会畜産部会において、生産者や流通関係の方からヒアリングを行うなど、活発なご議論をいただいているところです。生産者の皆様が、将来にわたって希望を持って生乳生産を維持・継続していただけるよう、取りまとめに向けて議論を深めていきたいと考えています。そうした中、本日、我が国の酪農を担う生産者の方々が一堂に会し、貴重な意見や体験を発表されることは誠に意義深いものと考えています。本大会を契機に、全国の酪農家同士がつながりを強めるとともに、優れた経営の取組が広く共有され、今後の我が国酪農の未来を担う優秀な経営者が一人でも多く育っていくことを期待する次第です」。

▲ 農林水産省生産局 畜産部畜産企画課
課長補佐 今崎裕一氏

続いて、鹿児島県知事 三反園訓氏により祝辞が述べられました。

「第48回全国酪農青年女性酪農発表大会が関係の皆様多数御出席のもと、盛大に開催されますことを、お喜び申し上げます。また、鹿児島県で開催であります大会に、全国各地からお越しの皆様を心から歓迎いたします。全国酪農青年女性会議及び全国酪農業協同組合連合会におかれましては、日頃から全国の酪農家の親睦・交流や最新の技術・情報の提供、生乳の広域流通など様々な活動を通じて、経営力の向上と酪農業界の発展に御尽力いただいており深く敬意を表

▲ 鹿児島県知事 三反園訓氏

します。さて、近年の酪農をとりまく情勢につきましては全国的な酪農家戸数の減少や後継牛不足などの生産基盤の脆弱化に加え国際経済連携協定の進展など多くの課題に直面しております。鹿児島県におきましては酪農家の体質強化や牛乳・乳製品の安定供給を図るため国の畜産クラスター事業等を活用し酪農家の皆様の労働負担を軽減するために機械導入や酪農ヘルパー組織を支援するなど一層の生産基盤の強化に努めているところです。皆様におかれましては大会での優良経営事例の発表や全国の仲間との意見交換を通じてその知見と技術を共有することで更に磨きをかけられ、生産性の高い豊かでゆとりある酪農経営につなげられ酪農業界の発展に貢献していただきますことを御期待申し上げます。さて、鹿児島県は、雄大な桜島や世界自然遺産の屋久島をはじめとする美しい自然、霧島や指宿などの良質で豊富な温泉、個性ある歴史・文化など多彩な観光資源にあふれています。また、鹿児島黒牛をはじめ、かごしま黒豚やブリ・カンパチなどの美味しい農畜水産物もございますので是非この機会に鹿児島の豊かな自然や食を満喫していただければ幸いに存じます。令和4年には、ここ鹿児島で第12回全国和牛能力共進会鹿児島大会が開催されます。様々な機会を捉えて鹿児島へお越しいただきますことを心からお待ちしております」。

▲ 鹿児島市副市長 松永範芳氏

最後に、鹿児島市副市長 松永範芳氏より祝辞が述べられました。

「全国各地からお越しの皆様方を心から歓迎いたします。全国酪農青年女性会議ならびに全国酪農業協同組合連合会の皆様におかれましては、かねてから、綿密な飼養管理や家畜防疫の徹底、搾乳体験等を通じた乳製品のPRなどに取組まれるとともに、人々の健全な食生活を支える、安心安全で良質な牛乳・乳製品を供給いただいております。このように、全国において、酪農業の発展に大きくご貢献いただいておりますことに、深く敬意を表し、衷心より感謝申し上げます。さて、皆様をお迎えするここ鹿児島は、全国屈指の畜産県であり、1万4,300頭あまりの乳用牛が飼育されておりますが、高齢化の進展や後継者不足などによる飼養戸数の減少傾向は、全国と同様であります。鹿児島市におきましても、同じく厳しい経営環境にございますが、自動搾乳機などを先進的に導入し、省力化と生産性の向上に取り組むなど、今後の事業展開が期待されているところです。このような中、全国各地より、優れた酪農経営と評価され、推薦を受けた皆様が一堂に会し、先進的な経営成果の発表や、酪農意見・体験発表などを通じ、情報共有や意見交換が図られますことは、酪農業の発展に大きく寄与するものであり、本大会が実り多い成果を収められますことを念願いたします。ところで、今年4月より、NHK連続テレビ小説「なつぞら」の放送が始まり、物語の前半では、北海道の十勝地方を舞台に、主人公が酪農に従事しながら成長していく姿が描かれました。今後、ドラマを通じて酪農への関心が少しでも高まっていくことを期待しているところです。今回の開催地でありますここ鹿児島市は、活火山・桜島と錦江湾に代表されます雄大な自然、歴史・文化、源泉豊富な温泉など、魅力あふれる国際観光都市です。また、鹿児島黒牛や黒豚、黒さつま鶏の畜産物や、本格焼酎やさつまあげなど、郷土色豊かな食の都でもあります。皆様には、是非この機会に、鹿児島の魅力を存分にご堪能いただき、大会の大きな成果とともに、たくさんの素晴らしい思い出もお持ち帰りいただきたいと存じます」。

ご来賓の祝辞に続き、全国酪農青年女性会議の役員、委員として長年に渡り会議活動に参加され、

昨年の改選において役を退いた方への功労者表彰がありました。

今年度は北海道会議の松崎繁前委員、東北会議の半澤善幸前委員長、一戸智前委員、中部会議の堀山静代前委員、九州会議の小薗千弘前委員が表彰され、小森委員長より感謝状と記念品が授与されました。

開会式終了後、地域の代表者各6名による酪農経営発表と酪農意見・体験発表が行われ、その間に第46回らくのうこどもギャラリーの表彰式が行われました。当日は特選に選ばれた熊本県の田尻琥太朗くん（5歳）をご両親と共に会場にお招きし、小森委員長から賞状と記念品が授与されました。授与後の全国会議引頭委員からのインタビューでは、琥太朗さんのかわいらしい受け答えに会場からは大きな歓声と拍手が沸き起こりました。

2日目には、第10回酪農いきいきフォトコンテストの表彰式がありました。この企画は、牛乳の生産現場を消費者に知ってもらうことを目的として開催しており、各地域より寄せられた応募作品46点を全国大会で掲示し、参加者投票による審査の結果、関東甲信越酪農青年女性会議山川靖彦さんの作品「私の大きな友達」が見事「特選」に選ばれ（本号表紙掲載）小森委員長より記念品が贈呈されました。

続いて来場者から両部門発表者への質疑応答が行われました。休憩をはさみ酪農経営・酪農意見体験発表の部の審査講評並びに結果が発表され、酪農経営発表の部の最優秀賞には九州酪農青年女性会議代表の農事組合法人霧島第一牧場 池田雄太さん、酪農意見・体験発表の部の最優秀賞には東北道酪農青年女性会議代表の佐藤純子さん、また、酪農経営発表の部において審査委員長特別賞に北海道酪農青年女性会議代表の千葉澄子さん、意見・体験発表の部では中部酪農青年女性会議代表の北村克己さんが選ばれました。

表彰式終了後、砂子副委員長による大会宣言、佐藤監事による閉会の辞をもって全日程を終了しました。

▲ 表彰式にてインタビュー

▲ 田尻琥太朗くん

酪農経営発表の部 審査講評

志賀 永一 審査委員長

審査に当たりましては、酪農経営の収益性、経営の安定性・発展性、飼養管理技術水準、資源循環型酪農の実践、食品の安全性への配慮、組合・地域活動の貢献という6つの大会審査基準に基づき、厳正な審査を行いました。

今回発表された6名の方々は、異なる立地条件の中で、地域特性や地域資源を活かしながら技術選択を行い、経産牛1頭当たり乳量が1万kgを超える実績を上げ、酪農経営の安定性と収益性の確保に努力していま

した。自給飼料の確保、堆肥の利活用、さらには地域活動にも熱心に取り組んでいる様子を知ることができ、今年もまた審査委員一同大いに感心いたしました。

審査の中で特に印象に残った点、そして今後さらに期待したい点について、発表順に申し上げます。

チームワークで楽しくやりがいのある酪農経営をめざして

北海道酪農青年女性会議
千葉 澄子さん

千葉牧場の特色は、この優位な飼料畑を土壌分析など適確に管理した低コスト・良質自給飼料利用による多頭数・高泌乳経営です。とはいえ、経営破綻ともいえる状況からの再建過程での遵守事項、経営管理（北海道のクミカン活用）、乳飼比35％以下、年間100頭の後継牛確保は、経営で必要になる「具体的行動目標」として注目すべきです。

平成15年、29年、30年にFS牛舎、哺育舎、乾乳舎、ロータリーパーラーなどの投資を行い、作業条件を整備しています。この投資は今後10年を見据えた投資であり、現在の2，000tから3，000t出荷体制を目指すものでした。

千葉さんは北海道指導農業士、JA監事をはじめ、女性カレッジの塾長として活躍する一方、後継者夫婦、それを支える従業員とともにゆとりある経営の模索を続け、本年度法人化を計画しています。自己の経営にとどまらない、地域女性の地位向上などへの一層の活躍を期待します。

千葉さんは昭和60年に結婚を契機に埼玉県の非農家から酪農に従事しました。現在の経営概要は、経産牛223頭、育成牛212頭、飼料畑222ha（うちデントコーン42ha、牧草180ha）の粗飼料自給率98％の牧場です。

チャレンジ!! つねに前へ！
～良質な自給飼料の二毛作で高泌乳を目指す～

関東甲信越酪農青年女性会議
米山 淳史さん

米山さんは平成16年酪農ヘルパー経験後、戦後開拓からの酪農経営に就農しました。現在の経営概要は、経産牛55頭、育成牛36頭、飼料畑15ha（うちデントコーン15ha、裏作大麦12ha）の粗飼料自給率64％の牧場です。

平成30年にキャリロボ、固定式ミキサーの導入などにより作業効率の向上を図っております。また、それまでの牛舎投資などは手作りがほとんどでコスト削減が図られています。この機械化による省力・効率化とともに、裏作大麦をサイレージ調製することにより粗飼料自給率を高めていること、良質自給飼料給与と牛群検定やコンサルタントを利用した月1回の繁殖検診により繁殖成績の向上を図っていることが、特徴となっています。

今後は増頭ではなくNTPの高い乳群改良に努め、より効率的な酪農経営が目標として設定されています。作業効率を見直し、夫婦を基本に、「2人でやれる酪農経営の実現」に期待しています。

我が家の更なる飛躍を目指す効率酪農経営

東北酪農青年女性会議
安齋 洋志さん

安齋さんは平成15年に祖父の代から始めた酪農経営に就農しました。現在の経営概要は、経産牛42頭、育成牛36頭、飼料畑15ha（うちデントコーン4・4ha、牧草10ha）の粗飼料自給率42％の牧場です。

粗飼料生産では自給飼料組合により共同生産を行うとともに、稲WCS

も活用し、国産飼料利用を重視した酪農経営が行われています。この飼料の効率的な利用を図るため、平成30年に自動給餌機、サイレージストッカーを導入し、多回給与を行い、省力化を図るとともに乳量向上を実現していました。この飼料設計や経営管理において「全酪連をはじめ関連支援組織との協調や利用」が行われていることも特徴となっています。

今後はTMRセンター設立が予定されており、国産飼料生産を重視しながら、地域が一体となったさらなる効率的な酪農経営の展開が期待されます。

『三つのゆとり』で地域とともに歩む山地酪農

西日本酪農青年女性会議
古川 善久さん

古川さんは平成17年お父さんが急逝されたことを契機に就農しました。現在の経営概要は、経産牛44頭、育成牛14頭、飼料畑12ha（うちデントコーンha、牧草ha）の粗飼料自給率68％の牧場です。

標高600mの山間地に立地していますが、河川敷24haを7戸の管理組合で粗飼料生産を行い、高い粗飼料自給率を実現しています。平成18年に60床牛舎、バルク、自動給餌機などの投資を行い、労働負担の軽減を図るとともに、外国人技能実習生の受け入れにも取り組んでいます。

突然の就農であったことが、基礎的な酪農の飼養管理技術の見直しを必要とさせ、観察に基づき給水の改善、牛床マットへの配慮、換気などへの気遣いにより「健康な牛」を目指した飼料管理が行われていました。

家族そろっての勉強会参加という経験を踏まえ、技能実習生への飼養管理技術指導に努力されており、現在、乾乳牛舎を建設しており、施設整備により信条とする経済、労力、精神の「3つのゆとり」を目指した、本牛舎60床の有効活用による増頭が期待されます。

社会情勢の変化に対応した継続的な酪農経営を目指して

中部酪農青年女性会議
近藤 貴幹さん

近藤さんは平成14年に酪農実習経験後に就農し、平成29年に法人化し代表取締役に就任しました。現在の経営概要は、経産牛214頭、育成牛109頭、飼料畑はないため粗飼料自給率0％の牧場です。しかし、都市近郊に立地することから各種粕類を活用した発酵飼料生産を行い販売も行っています。

都市近郊という立地は、牛舎環境の整備に特段の対応を求めますが、環境衛生面への実践が行われています。副産物利用も飼料自給向上であるとの考えを持った発酵飼料生産、作業のマニュアル化や勉強会参加を通じて長く働いてもらう雇用管理などが特徴となっています。

今後、さらなる拡大計画を有しています。労働も楽で、考えながらの「楽脳」の実践という都市近郊立地を生かした酪農の方向を示す取り組みとして期待されます。

経営危機を乗り越えて

九州酪農青年女性会議
農事組合法人霧島第一牧場
池田 雄太さん

池田さんは昭和45年に国のパイロット事業地の払い下げを受けスタートした農事組合法人に就業し、現在牧場長として農場運営を行っています。現在の経営概要は、経産牛156頭、育成牛146頭、飼料畑83ha（うち牧草74ha、野草地9ha）の粗飼料自給率46％の牧場です。

多大な負債を抱えたこともありま

したが、良質自給飼料生産、飼料設計、定期的な削蹄や繁殖検診により、良好な飼養管理成績を実現し、経営再建を成し遂げました。現在、経産牛1頭当たり1万2，000kgの乳量をあげるとともに、体細胞数年間平均9万／mℓという良好な乳質を誇り、「低コスト」で「高い収益」を実現しています。また、法人経営として、従業員の労働条件、福利厚生の改善に取り組み雇用環境の整備を進めてきました。

現在、搾乳ロボット導入、FS牛舎建設をすすめ鹿児島大学とスマート農業の実証研究に取り組む計画であり、今後の大規模酪農経営の方向性を考える取り組みとして期待しております。

審査結果ですが、今回も非常に悩ましい審査となりました。6名の審査委員の評価結果は、上位2名の経営が極めて優れていることでは一致しましたが、両者の評点は拮抗し、まったく甲乙つけがたい内容でした。両者の飼養管理技術水準、酪農経営の収益性と安定性、組合と地域活動への貢献には一長一短があるものの突出しておりました。そこで6名の審査委員で何度も両者の長所と短所について検討を繰り返し、ようやく全員一致の合意を得ることができました。

最終的に結論づけた要因は、6つの選考基準のなかでもより高い経済性、いわゆる「低コスト生産」と「高収益性」の実現です。地域の立地条件を受け入れながら牛にも、働く人にも優しく、しかも周りの人にも、普段接することの少ない消費者の人にも優しい酪農経営の実現は必然的な方向です。酪農全体に目を転じれば、飼養戸数の減少などから生乳生産量は減少し、乳価は上昇するという思わぬ幸運に恵まれました。しかし、TPP11、日欧EPAなど酪農をめぐる情勢は不透明であることは皆さんも感じていることだろうと思います。こうした不透明さを打破しようとするのが、この発表会の目的であると思います。とするならば、やはり「低コスト生産」でかつ「高収益」を安定した経済・財務状態で実現することが必要となります。

今回の審査では、厳しい経済状況から経営再建を行い「低コスト生産」「高収益」を実現したという点において、わずかながら一歩リードしていた九州酪農青年女性会議の農事組合法人霧島第一牧場の池田雄太さんの経営を最優秀と致しました。

また、惜しくも最優秀の選には届かなかったものの、高い経営管理水準で「低コスト生産」をおこなうとともにJA監事、女性塾の塾長など地域とのかかわりを大切にした活動を続けておられた、北海道酪農青年女性会議の千葉澄子さんに、審査委員長特別賞を授与することと致しました。大規模な酪農の法人経営がみられるようになってきておりますが、酪農経営は家族経営が主体で、女性の役割は大変大きなものがあります。千葉さんは酪農経営に加えて「農業における女性の役割に挑戦」されており、酪農女性のあり方の一つの手本を示していただいたと考えた次第です。

最後になりますが、本日の受賞者はもちろん、発表をいただいた6名の酪農経営は、地域の条件、これまでの経験をもとに、それぞれの明確な酪農方針をもっておりました。大切なことは、それが現在の酪農情勢の中で多くの酪農経営にも求められる酪農方針であることです。会場にお越しの皆様におかれましては、発表者の酪農に対する考え方、それが生まれ出た背景などを共有し、自らの経営や地域を見つめ直し、より力強い日本酪農を築いていただければと期待いたしております。

酪農意見・体験発表の部は次号に掲載します

ニューヨーク州出張報告

6月3日から6月6日にかけてコーネル大学が主催する乳牛栄養学基礎短期講習が、ニューヨーク州のウイリアム・マイナー研究所で開催されました。今回、この講習会に全国5支所から全酪連職員が参加し、また、講習会の後はニューヨーク州近郊の酪農関連施設を2日間視察して参りましたので、ご報告します。

乳牛栄養学基礎短期講習

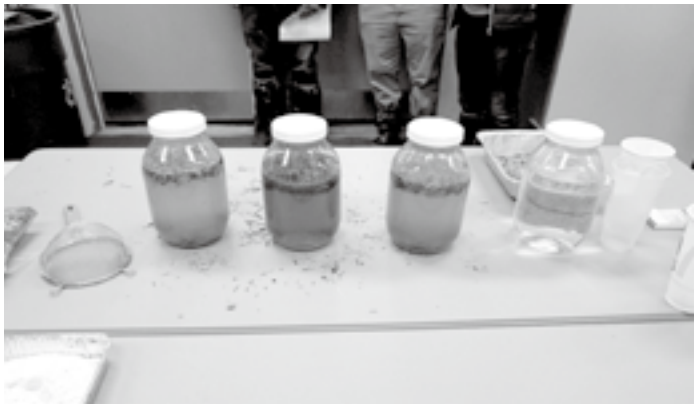
乳牛栄養学基礎短期講習は、1年おきにウイリアム・マイナー研究所で開催されます。コーネル大学の教授やマイナー研究所の研究員など、各分野のスペシャリストが講義を行います。参加者は約70名で、多くが飼料会社やコンサルタント業務に携わる人たちでした。講義の内容は、自給粗飼料管理から哺育・育成管理、乾乳・移行期管理と幅広い分野を網羅します。座学だけではなく、マイナー研究所の実験牧場では、生産現場で実践できる飼養管理の確認法などを学びました。

自給粗飼料管理についての講義では、牛の健康と生産性をサポートするための飼料価値の高い粗飼料の栽培や刈り取り、次いで刈り取った粗飼料の質を劣化させないための保存方法を学び、粗飼料の重要性を痛感しました。また、哺育・育成管理においては、子牛の発育能力を最大限に活かす飼養管理、ストレスのない離乳プログラム、妊娠育成牛の効率的な管理などを幅広く学びました。その他、乾乳牛・移行期牛管理や窒素の利用効率の改善など、乳牛の飼養管理を行う上で欠かせない内容を総合的に学びました。今回短期講習で学んだ内容は他の全酪連職員と共有し、ひいては生産現場へ反映できるようにして参ります。

Dairy One飼料分析ラボ

Dairy Oneは酪農家の出資によって設立された協同組合で、分析センターはニューヨーク州のイサカに位置します。Dairy Oneでは牛群検定など様々なサービスを行っていますが、中でも飼料の分析においては世界的にも信頼されている分析機関です。飼料分析は1年間で20万検体以上行われており、米国外40か国からも分析依頼があります。日本からの分析依頼は、検体数全体の2％程度との事です。

分析方法は、近赤外線を使った分析（NIR）と化学分析の2つの手法があり、NIRはサンプル中の有機成分の含有量との相関関係を解析して得られた検量線にあてはめて測定する方法で、検体を迅速に分析することが可能です。全酪連の分析センターを含めた世界12か国26か所でも、Dairy Oneの検量線を用いた分析が行われていますが、元となる検量線を作れるのはDairy Oneだけです。一方化学分析では、様々な方法を用いて項目別に分析値を検出します。他にもDairy Oneでは、米国内に限定されていますが土壌や水、乳



▲ 短期講習の実地指導
ルーメン内の様子を、ガラスジャーを使用して説明

質の分析も行っています。土壌分析は近年検体数が増えており、月1,000検体ほどになっています。

Dairy Oneでは正確な飼料分析を短い時間で行うことが可能で、米国内でも多く利用されています。日々変化する自給粗飼料の質を刈り取り時の分析値で、飼料設計の予測や圃場別のロール管理などにも役立ちます。スピーディーかつ一貫性のある飼養管理を行う上で、NIR分析はとても役に立つと感じました。全酪連の分析センターでも同じNIRを用いた分析が可能ですので、皆様ぜひご活用ください。

▲ 講習を終えての1枚

▲ Dairy Oneの視察　NIRの機材（右）と、分析担当者

Hat Field Farm 搾乳ロボット牛舎

ハットフィールドファームは搾乳牛飼を550頭管理し、その内2産以上の牛は搾乳ロボット牛舎で管理しています。牛舎は、側面が巻き上げカーテン2段で開放的な牛舎です。換気方式はインバーターファンによる強制換気で、牛舎内は涼しく保たれていました。ベッドにはウォーターマットが敷設されており、さらに粒子の細かい砂でベッドメイクされていました。

搾乳ロボットはレリー社のA3を4台導入しており、視察日の搾乳頭数は228頭で、当日の総生産量は10,252kg（1頭当たり：45kg）でした。PMR（パーシャル・ミックスド・レーション）は平均乳量のマイナス6・75kgで設計しているとのことでしたが、同牧場の直近の平均乳量が45kgだとしても概ね38kgの乳量設定でPMRが設計・給与されている事になります。高い個体乳量と長い泌乳持続性で牛群が構成されていることが理解出来ました。

乾乳舎は別の敷地にあり、分娩10日前に搾乳ロボット牛舎へ戻ってくる流れとなっています。その際には搾乳ロボットをフィードステーションとして利用しているとのことでした。搾乳ロボットの設定では、配合飼料給餌設定は前述の分娩10日前から始まり分娩後15日以降に1段階目、100日以降に2段階目の2段階乳量階層別給餌量（個体平均乳量に応じて給餌量が牛ごとに異なる設定方法）となっています。また搾乳回数の設定に関しては、分娩後30日間は1日の搾乳回数が最高・最低回数ともに5回となっており、この回数をクリアしない牛は警告が出る設定となっています。

当日は晴天であったため牧場主の方は1番草の刈り取りのため不在でした。搾乳ロボット牛舎のみの視察でしたが、牛舎案内は同牧場が利用している飼料会社担当者が対応して下さいました。視察で一番の驚きは、1日10,000kgを超える乳生産を行っている搾乳ロボット牛舎の管理を、基本的に1名の従業員で行っているという事です。ロボットから送られてくる個体データを有効的に活用して作業効率を上げる、その高い収益性からは学ぶことが多いと感じました。

▲ Hat Field Farmのロボット搾乳牛舎

Lawton's Jersey Farm

家族経営で経営主のティム親子、お祖父さん、お祖母さんが対応してくださいました。当農場は、ジャージー種の搾乳牛75頭、乾乳牛20頭、子牛20頭を管理しています。個体平均乳量は約30㎏、脂肪5・0％、乳蛋白（真蛋白）3・8％となります。対尻式タイストール、TMR給与で搾乳牛を管理しており、牛舎内換気はトンネル換気で行っていました。夏場は、夜間放牧を行い、冬場は細かなファンコントロールによって牛舎内の空気を新鮮に保っているとの事です。天井裏に断熱材が入っている牛舎は、風通しが良く涼しい、とても良い飼養環境でした。哺乳子牛は屋外にあるカーフハッチで管理されています。全乳と販売不可能乳を給与し、最大哺乳量を2ヶ月間給与した後に3か月齢を目安に離乳します。

▲ Lawton's Jersey Farmの搾乳牛舎風景
農場主のティム・ロートン氏

自給飼料はトウモロコシ、リードキャナリーなどを作付しています。訪問した際は1番草の収穫直後でした。収穫の目安をうかがったところ、1番草は、背丈が70㎝程に成長したら収穫し、その後、28日～30日周期で4番草まで収穫しているとのことでした。刈り取った粗飼料はチューブバッグにて発酵させますが、その際に圃場毎にバッグに目印を付けて、使用する前に成分分析を必ず行って使用しています。

牛の観察は毎日欠かさずに行い、牛群のコンディションを基に、10年以上当牧場を担当している飼料メーカーの担当者と都度相談して、給与内容を決めています。ティムさんは、作業や牛の観察のために毎日10時間ほど牛舎で過ごすとのことで、牛の異常の発見などが非常に早いと思われます。実際、牛の汚れは少なく疾病の発生はほとんどない、非常に良好な管理を行っている事が感じられました。牛も非常におとなしく（後ろを通っても立ち上がらない、ビクつかない）、経営主の性格やハンドリングが牛に現れていると感じることができました。

典型的な家族経営の農場で、日本の家族経営農場となんら変わらないと感じました。少ない人員の中でも時間を有効に活用し、牛にとって最良の粗飼料を給与し、上手に牛を管理されていました。家族仲良く、楽しく経営されているのが一番と、改めて感じました。

EZ Acre牧場

飼料設計ソフトのAMTS社社長、トム・タルーキー博士が共同経営を行っている農場です。経産牛は850頭、哺育・育成牛は750頭です。平均乳量40㎏、乳脂肪3・8％、真蛋白3・3％と非常に良い生産成績です。フリーストール管理ですが、疾病牛やフレッシュ牛はタイストールで一時的に個体別管理をします。給与メニューはタルーキー博士によって設計されており、イネ科牧草主体の栄養設計になっています（乾物で最大63％の割合）。その為、自給粗飼料は品質と収量確保の両方に努めています。自給粗飼料はアルファルファおよびイネ科牧草で、年4回収穫し、その後バンカーサイロにて発酵させます。デントコーンとハイモイスチャーコーン（日本におけるイヤコーンに類似した子実主体の収穫物も確保）も同様にサイレージとして保管しています。

▲ EZ Acre牧場の泌乳牛舎の風景　旧牛舎を延長し、過密を解消した

給与する対象牛を絞った圃場管理計画を立てており、栄養と収量の観点からイネ科1番草は乾乳用として、施肥は尿素のみで管理をし、比較的遅刈りで収穫します。その後、堆肥散布をして、再生草は搾乳牛向けとして出穂直前に刈り取ります。州の条例により環境への配慮もしなければならず、3年周期で土壌分析を行うほか、年に2回の堆肥分析を実施しています。また、生活用水汚染を防ぐために、施肥プログラムの見直しを常に実施しています。

日本と自然・社会環境は異なりますが、費用対効果の高い酪農経営をする上で、品質の高い自給粗飼料が不可欠であることを改めて感じました。設備投資においては、現在の経営規模に至るまでの設備配置や作業動線の見直し、既存施設の再利用など、酪農場が将来ビジョンを持って計画的に経営を発展させてきた印象を受けました（現在も発展中）。計画的な経営の重要性について再認識しました。酪農場に限らず、経営体（農協団体・企業など）は、経営を成長させるための鮮明な計画や目的意識を経営者／労働者間で共通意識することにより、順調に成長すると感じました。

コーネル大学付属農場（農学部）

2013年9月から作業全般を完全外部委託しており、2016～2018年にかけて24題の研究結果を報告しています。2019年6月8日現在、総飼養頭数およそ1,200頭、搾乳牛550頭、乾乳牛91頭、育成牛556頭（内、哺育牛45頭）、乳脂率4・1％、乳蛋白率（真蛋白）3・0％、分娩間隔371日（12・3カ月）、初産分娩月齢21～22カ月齢、平均乳量39～41kg／日・頭、MUN9～11mg／100ml、体細胞数19万と、高いレベルの牛群成績で高乳量・高繁殖を実現しています。

自給粗飼料はデントコーン、ハイモイスチャーコーン、アルファルファ、イネ科グラスで、作付け総面積は560haに及びます。粗飼料はチューブバッグとバンカーサイロに保管し圃場ごとにサンプル採取と分析を実施しています。

パーラーは16頭Wパラレルで3回搾乳を実施しています。フリーストールで管理される搾乳牛群は大きく試験用牛群と非試験牛群に分けられ、試験用牛群はさらに首輪の色によって6群に分けられます。試験牛以外の搾乳牛群はフレッシュ、繁殖（未受胎）、泌乳後期に分けられ管理されています。その他、乾乳牛群はファーオフとクロースアップの2群で管理されています。その他80頭繋ぎ牛舎もあり、試験の種類によってはこちらで試験牛を管理します。視察時は、繋ぎ牛舎でトム・オバート博士主導のトレースミネラルと繊維の消化性の試験、マイク・ヴァン・アンバーグ博士主導のアミノ酸の試験が行われていました。

試験牧場という事で、群分けの方法や牛舎の使い分けなど、実際の生産現場とは管理環境が異なるところもありました。しかし、自給粗飼料の品質に注意する点やTMRを作る際の切断長の管理、カウコンフォートの徹底など現場に共通するところは多くあります。これからも継続的にコーネル大学をはじめとした、酪農科学の最先端を行く研究室から最新情報を得、日本の酪農生産現場の発展に繋がるよう貢献していきたいと思います。

▲ コーネル大学試験牧場の入り口風景

最後に

今回の講習と視察を通し、生産現場に必要とされているものは、特別な技術情報の提供や飼養管理方法の提案ではなく、生産者の方が実行可能な最新技術を提案することであると感じました。同時に、牛の反応を正確に読み取り、検証し、そして再度調整する。この繰り返しが重要なことだと再確認しました。当然ニューヨーク州の管理方法をそのまま日本で実践させることは難しいのですが、各地域の状況にあった方法で、今回学んだことを応用することは可能だと感じます。酪農技術の結晶を生産現場で応用し、生産性を上げることによって、今後の日本の酪農の発展に貢献していきたいと考えます。

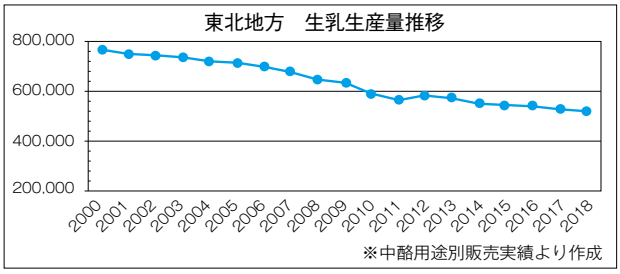
北福岡工場紹介

全酪連北福岡工場は、岩手県二戸市に位置し馬淵川をはじめとする豊かな自然に囲まれた工場です。1952年（昭和27年11月）に当時の二戸酪農協が経営する乳業工場を引き受けて全酪連 北福岡工場として発足し現在まで、半世紀以上の間操業を続けています。

操業開始時は市乳をメインにバター・練乳等の製造及び販売を開始し、1971年（昭和46年）には、生産者団体のプラントとして初めてナチュラルチーズの製造を開始し、1978年（昭和53年）には、高まる生乳需給調整の声に応えるべく乳製品ラインを新設し東日本の生乳需給調整の一役を担っていました。現在は市乳部門を1999年（平成11年）奥中山高原農協乳業に移管し工場は乳製品の専門工場となっております。

生乳需給調整機能を高めるべく、2003年（平成15年）には乳業再編対策事業（需給調整拠点施設整備）として設備の整備とバターマシン及びタンクの増設を行い、その貯乳能力は860t、処理能力は日量300tとなりました。2006年（平成18年）需給緩和の時期には機能を発揮し、東日本の生乳を一滴たりとも廃棄する事はありませんでした。

しかしながら、東北地方で生産される生乳量も年々減少の一途をたどり、2000年代初頭と比較すると、約32%減少し、それに伴い本会で取り扱う生乳量も少なくなっています。



生乳取扱量が減っている今こそ、私たち北福岡工場は酪農家の皆さんと消費者を繋げる架け橋となれるよう、今後も高品質の酪農家バター、みちのくゴーダチーズを作り続け、人とウシに寄り添った乳製品工場として在り続けるよう尽力いたします。

▲ みちのくゴーダチーズ

▲ 北福岡工場

▲ 酪農家バター

日本酪農 見て歩紀 No.315

Misomi牧場

福井県若狭町

地元で新規就農、酪農家はじめました！

▲ 上山さん

地域の紹介

今回紹介するMisomi牧場は、福井県の南部、京都府との県境に近い若狭町にあります。

若狭町は日本海の若狭湾に面しています。若狭湾は魚が豊富で、鯖寿司や鯖のへしこなどで有名です。

また、町内にある三方五湖という5つの湖は風光明媚な観光地となっており、その中でも水月湖は湖底の堆積物が古代の環境の記録を残していることが研究者により発見され学術的にも注目を浴びております。

福井県の酪農

Misomi牧場の所属する福井県経済農業協同組合連合会（堺井英輝代表理事理事長）は生乳出荷戸数18戸、年間生乳生産量は5，178t（平成30年度）となっています。福井県の南部に当たる嶺南地区の酪農家は敦賀市1戸、美浜町1戸、そして若狭町のMisomi牧場の合計3戸です。

▲ 三方五湖

▲ 牛舎全景

Misomi牧場の状況

Misomi牧場を経営するのは上山裕介（かみやまゆうすけ）さん（35）です。

作業は上山さんと社員の畠中源一さん（79）の2人で行っています。

上山さんの担当は飼養管理全般で、搾乳と給餌は1人で行います。

朝夕の作業と夏場の牧草作りの手伝いが畠中さんの担当です。

ヘルパーは月2回ほど利用しています。

現在の頭数は、搾乳牛25頭、育成牛10頭です。育成牛については外部へ預託しています。

生乳生産量は年間177tで、現在の乳成分は乳脂肪3・95％、無脂固形8・68％、乳蛋白3・3％、体細胞20万以下となっています。

▲ 牛舎入り口

▲ 牛舎内

牛舎はつなぎ牛舎で、給餌作業は分離給与で朝2回・昼1回・夕方2回に分けて給与しています。

給与内容は、配合飼料として乳量に応じて全酪連ベース配合とサプリメント配合を、粗飼料としてクレイングラス、スーダングラス、オーツヘイ、自給飼料、ホールクロップサイレージを組み合わせています。そのほか全酪連添加剤も使用しています。

自給飼料はイタリアンライグラスとスーダンを作っています。飼料畑として現在4haを借りています。

糞尿処理は、若狭町の運営するエコクル美方という処理施設が毎日コンテナを回収に来ます。そこで処理された堆肥は、製品として袋詰めで販売されたり、地元の畑で利用されています。

▲ エコクル美方

新規就農までの道のり

経営者の上山さんは非農家の出身で、サラリーマンの家庭に育ちました。

京都府で生まれ、小学校5年生のときに若狭町に引っ越してきました。

小学校に入学する前に農業体験をしたこともあり、すでに子供の頃から酪農に興味を持っていましたが、地元に農業高校が無かったため、高校は福井市の県立農林高校へ進みました。その後、酪農学園大学へ入学し飼料作物の研究室に所属しました。

夢は自分の牧場を持つことでしたが、内情を知れば知るほど、非農家の自分には金銭的に新規就農はハードルが高いと感じるようになっていき、大学卒業後は、群馬県の牧場で従業員として勤務しました。

3年ほどしてご家庭の事情で地元福井県に戻ることになりましたが、地元に戻ってからも牛に携わる仕事がしたいとの希望を持ち続け、スーパーでアルバイトをしながら牛の仕事を探していました。

そのような中、近所の家畜保健所より紹介された二州農林普及所に相談したところ、家から車で15分の所に、畠中源一さんという酪農家がいることがわかり、すぐに畠中牧場にアルバイトで入ることになりました。地元に酪農家がいるというのは以前から知っていたそうですが、実際にご本人と会うのはこの時が初めてだったそうです。

アルバイトは5年間に及びましたが、当初は、大好きな牛の仕事のバイトという感覚でした。

一方で、畠中さんはご家族に酪農後継者がおらず、後継者を探していたタイミングでもありました。

そこで上山さんが後継者候補とし

て手を挙げたことから話は急展開します。

上山さんと畠中さんで本格的に第三者継承による事業継承を行うこととなり、青年就農給付金（準備型）を活用し引き続き2年間の新規就農研修が行われ、そして上山さんは夢が叶い、今から4年前に畠中さんから事業を引き継いで経営者となり今に至ります。

上山さんによると、新規就農することができた要因として、普及所が入ってくれたことが大きかったそうです。上山さんが新規就農のやり方が全く分からず二州普及所に相談したところ、普及所が上山さんと畠中さんの間に入り、そこに日本政策金融公庫がアドバイザーとして参加し、どのような形で事業継承するかの話し合いが何度も行われたそうです。話し合いは1年近くに及びました。その結果、上山さんと畠中さんで合同会社を作ることに決まり、合同会社Ｍｉｓｏｍｉ牧場としてスタートすることになりました。Ｍｉｓｏｍｉとは牧場所在地の地名「三十三」からとったものです。

事業継承に当たっては、譲渡者と譲受者で利害関係をいかに円満解決するかが課題となりますが、上山さんによると、畠中さんは地元に酪農を残したい、施設を活用してほしい、という思いが強く、円滑に話が進んだのは畠中さんのご厚意によるところが大きい、とのことでした。

また作業方法については、事業継承当時は、大幅な作業変更はリスクを伴うため、畠中さんのやり方をなるべく踏襲するかたちで行っていましたが、現在は牧場のトラブルに対応する形で全酪連の担当者のアドバイスを参考にして修正を加えている段階とのことです。畠中さんも、上山さんのやり方に任せてくれているそうです。

次の目標へ

当面の目標は搾乳頭数を増やすことです。

就農した当時は牛のトラブルも多かったそうですが、飼養管理の見直しなどにより現在はトラブルも減り安定してきたので、次は牛に無理をさせない中で繁殖成績を改善し自家産育成牛を中心に頭数を確保し経営を安定させていきたい、とのことです。

精液はホルスタインを中心にして、Ｆ１やＥＴにも取り組んでいます。群馬県で働いているときに授精師免許を取得して、現在は自分で人工授精を行っています。

最近、個体管理に力を入れるため普及所の職員に協力してもらい、個体別ボードの取り付けも行いました。

この先、出荷乳量の増加、ソフトクリームづくり等、6次産業化の目標もあります。

また、畠中さんが始めた地元の小学生の写生大会や見学者の受け入れ、牧場体験も引き続き行っています。

最後に

上山さんに、酪農家になってみてどうですか？と聞いたところ、「休日はないが、ストレスもなく、好きなことを仕事にできて楽しい」とのことです。上山さんは子供のころから、酪農の仕事以外で働くことは考えたことがないのだそうです。

また、上山さんに、これから酪農で新規就農を目指す人へのアドバイスを聞いたところ、「親子による継承だけでは農家戸数は減っていく。酪農の独立就農には億単位の資金がかかる。新規就農に第三者継承という方法があることを知ってほしい。市町村や普及所がバックアップしてくれれば成功の可能性はもっと高くなる。非農家でも新規就農できる可能性はある。」と力強く話してくださいました。

新規就農を見事に成功させた上山さんと、新規就農を応援いただいた畠中さんや関係者の皆様に敬意を表するとともに、Ｍｉｓｏｍｉ牧場の益々のご発展をお祈り申し上げます。

（Ｙ・Ｋ）

▲ 就農について語る上山さん

札幌支所発

北海道酪青女が取り組む「食育」を高校生がインタビュー！

高校３年生が「食育」をテーマに北海道酪農青年女性会議副委員長の引頭玉枝さんにインタビューを行いました。インタビューを行ったのは同じく委員を務める山下知子さんの娘さん。卒業論文を作成するにあたりテーマを「食育」とし、酪青女が毎年行っている「父の日に牛乳を贈ろう！」キャンペーンに着目。活動を受け入れる保育園の取組みと、酪農家が行う食育を題材とすることを決めたそうです。

引頭さんは岩見沢で畑作と酪農を兼業で営んでおり、北海道酪青女副委員長として毎年父の日キャンペーンほか多くの活動に参加いただいています。当日は事務局を入れて女性３人の集まりとなったこともあり、インタビューからついつい脱線してしまうこともありましたが、和やかな時間を過ごしました。引頭さんは「子どもたちに牛乳や酪農に親しんで知ってもらうことで、その親御さんを含めたご家族皆に継続的に牛乳を飲んでもらいたい」、また「このような活動によって「酪農」を知ってもらい、牛乳・乳製品の値上げにも理解をして欲しい」と活動に込める思いや、日々生産者として“消費者がいつでも安心して美味しく飲める”安全な生乳生産に取り組んでいることなどを話されました。

これらのお話がどのように受け止められ、論文となったのか、いつかこっそり読ませてもらいたいと思います。レポートは10,000文字だそう、がんばれ！　(T.H)

▲ 引頭副委員長(左)と山下彩芽さん(右)

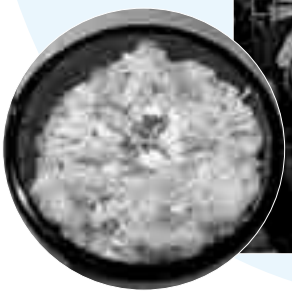
名古屋支所発

美濃酪農農業協同組合連合会 東濃地区酪農女性部が「牛乳料理研修会」を開催

７月17日㈬岐阜県、東濃牧場まきば館にて、美濃酪連東濃地区酪農女性部(花田美知子)代表が、牛乳料理研修会を開催しました。

以前にも地元の「ひがしみの農協」の会員様向けにクリスマスをイメージした牛乳料理を紹介しましたが、各地に出向き牛乳料理交流をはかった経緯もあり、自分達が牛乳料理を作って知ることで、それぞれの地域に戻り牛乳料理の普及を努めたいと開催されました。会員は７名と人数は少ないですが、ホエーを使って米を炊きちらし寿司にアレンジしたものや、牛乳とミートソースを使ったとり肉料理、デザートと、お腹いっぱいになりました。秋にはまた違った料理をとはりきっています。

女性部の皆様の普及活動が牛乳乳製品の消費定着の拡大につながっていく事を願っています。　(I.K)



仙　台
支所発

「スポーツ交流会」開催！
―岩中酪青年女性会議―

去る７月６日㈯に、岩中酪青年女性会議（桜井善委員長）主催のスポーツ交流会が、岩手県盛岡市の岩手中央酪農協（工藤定幸代表理事組合長）特設会場にて盛大に開催されました。

梅雨空が多い今年ですが、当日は天候にも恵まれまして、80名を超える会員が参集しました。開会式、ラジオ体操の後、岩中酪管内を「二戸」「北岩手」「八幡平」「玉山」「滝沢」「県南」の６つの地域に分けて、チーム対抗戦で競技は進められました。

最初は５人でタスキをつなぐ「牛乳早飲みリレー」。ストローでコップの牛乳を飲むのですが、飲むヨーグルトのコップもかなり置いてあるようでした。次は１チーム７人の「大縄飛び」。２人が縄を回して５人がジャンプ。練習では一回も飛べなかったのに本番では最高十数回も飛べました。次代を担うお子さんの「駆けっこ」もありました。最後は「ロール転がし」。男女ペア３組がロールパックを転がすリレーでした。終始大きな歓声と笑い声に包まれながら進行しましたが、対抗戦は点数拮抗で白熱しておりました。

競技終了後は、恒例のバーベキュー懇親会が行われ、ビールなど飲み物を片手にお肉や各自持ち込んだ自慢の漬物を頬張りながら、酪農談義や近況報告。一番草が終わった頃ですが、日頃の作業の疲れを癒しつつ、大いに親睦を深めるスポーツ交流会となりました。　（I.Y）

▲「牛乳早飲み」
だれかヨーグルト飲んでるでしょ？

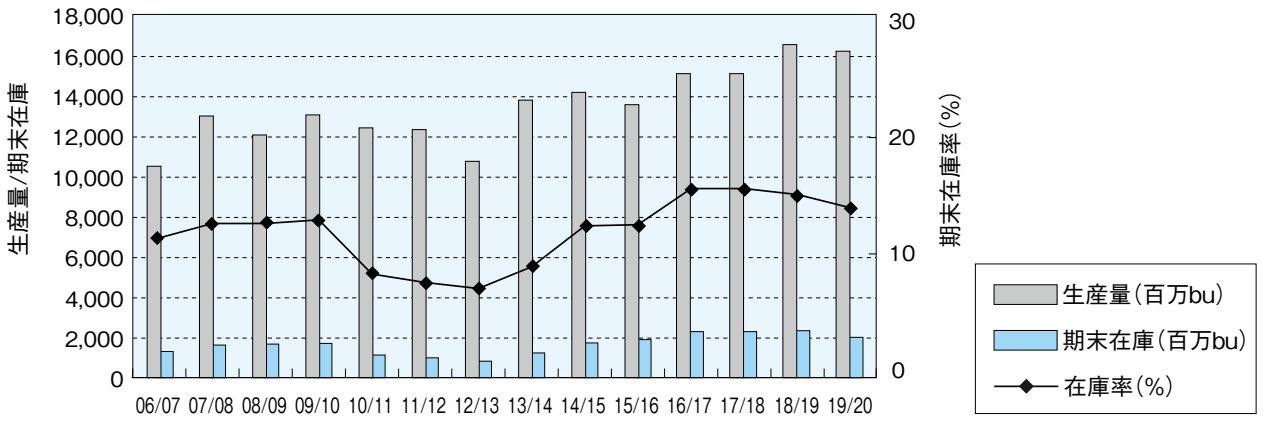
▲「大縄飛び」
5人そろったハイジャンプ

▲「ロール転がし」
競争しているのですが仲良くなって

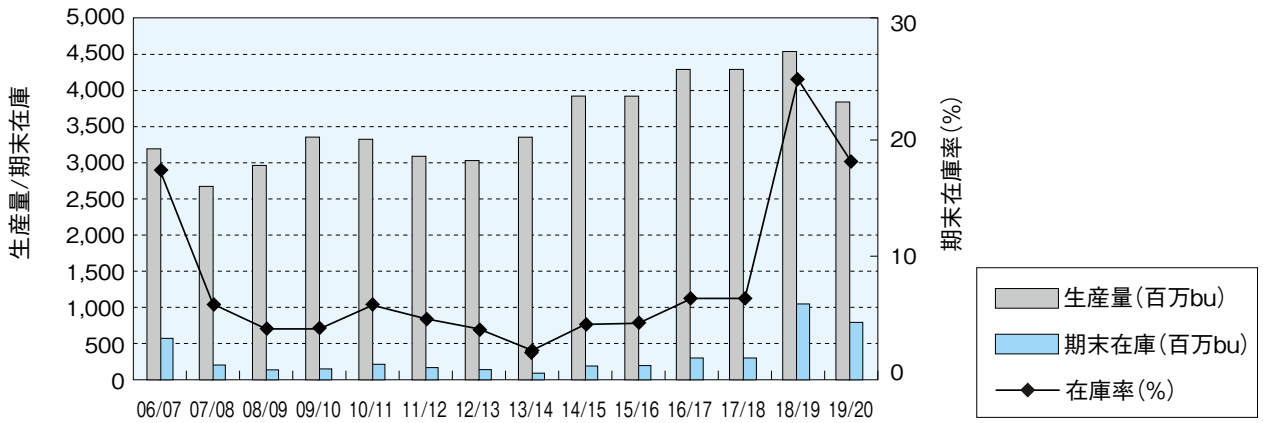
原料情勢　令和元年７月

		18/19年産	19/20年産
7月11日発表 米国農務省 トウモロコシ 需給予想	作付面積（百万エーカー）	89.1	91.7
	単　　収（ブッシェル/エーカー）	176.4	166.0
	生 産 量（ブッシェル）	165億9,500万	162億6,500万
	需 要 量（ブッシェル）	142億5,500万	142億5,500万
	期末在庫（ブッシェル）	23億4,000万	20億1,000万
	在 庫 率	16.4%	14.1%
トウモロコシ 相場動向	6月末の作付面積実績報告では、市場予想を大幅に上回る91.7百万エーカー（6/11USDA予想89.8エーカー）となり、シカゴ相場は一気に急落した。この発表に懐疑的な見方が多いため、8月に改めて作付面積の再調査結果が発表される予定。シカゴ相場は、高温乾燥予想で急騰、適度な降雨予報で反落するなど、本格的な天候相場の様相を見せている。作付が遅れたことによる更なる単収減少の懸念や、発表内容に対する不信感から、8月までの大幅な値下がりは期待しにくい。		
大豆粕相場動向	米中貿易摩擦が解消されない中、中国の大豆原料輸入は南米に依存している。南米原料大豆は収穫期の終了に差し掛かったことで一段と相場は急騰しており、日本向け輸出大豆粕の競争力を削ぐ要因となっている。今後、輸入大豆粕の使用が主体の地域においては他産地産となる見込み。国産大豆粕は搾油量、発生量は前年並みに推移しているものの、輸入大豆粕価格の切り上げに伴い引続き堅調に推移している。		
糟糠類	【一般フスマ】　現在のふすまの需給は適正に推移しているものの、ふすまの発生量は減少傾向にあり今後需給が引締まって推移することが予想される。		
	【グルテンフィード】　国内スターチメーカー主製品である異性化糖販売実績は例年を上回り好調に推移してきたが、長梅雨の影響による今後の販売実績について懸念される。また、グルテンフィードの配合率、使用量は高水準を維持しており冬場に向け需給が逼迫していく見込み。		
海上運賃	鉄鉱石の荷動きが急速に回復し、中国の旺盛な需要も後押しして、ケープサイズの海上運賃が高騰。この結果、ケープ船で運ぶ貨物をパナマックスに分割した方が割安となり、パナマックス船に需要が波及。同時に、EUの熱波で追加の電力需要が発生しており、石炭の荷動きも堅調に。更に南米の穀物需要も重なり、船腹の手当に傭船者が殺到する事態に至っている。		

米国産トウモロコシ生産量と期末在庫の推移



米国産大豆生産量と期末在庫の推移



輸入粗飼料の情勢　令和元年７月

北米コンテナ船フレート	各船社には、2020年1月から船舶燃料に含まれる硫黄分を大幅に減らす取り組みが求められています。この規制に対応する主な手段は、低硫黄の燃料への変更、もしくは新たに脱硫装置を設置することであり、いずれも多額のコストが掛かるため海上運賃へ転嫁されてくると予想されています。
ビートパルプ	【米国産】　前月にも記載した通り、冬場の歴史的な寒波と大雪、春先の冷涼・多雨の天候によりトウモロコシと同様、ビートの作付にも大きな後れが発生しています。この影響で、現時点では今後の生育環境が好転してもこれまでの遅れを回復することは難しいと考えられています。新穀の相場は、作付及び生育の遅れやトウモロコシの直近の相場、さらには物流経費の上昇、全体の需給バランスなどを受け判断されると見られます。今年は作付の遅れにより不確定要素が多いため、新穀の価格決定は例年より遅れる見込みです。
アルファルファ	【ワシントン州】　主産地コロンビアベースンでは１番刈の収穫作業が終了し、一部の圃場では２番刈の収穫が開始されています。コロンビアベースン全体では１番刈の50-70％で何らかの雨当たり被害に遭っており、残りは雨を避けたため刈遅れ品質のものが大半で、高成分かつ良品の発生割合は限定的となっています。今年の１番刈の特徴は、冷涼な気候による生育の遅れと、降雨を避けるために全体的に収穫作業が遅れたことから例年に比べて成分は低めの傾向で、茎は細め、全体の質感としては硬めな仕上がりとなっています。また、昨年と同様に収穫期間中に風が強かったことから、夜露が降りにくい状況が続き、全般的に過乾燥な傾向にあります。産地相場は、18年産の繰越在庫が過去に例を見ないレベルで少なく、国内外の需要も堅調な中、昨年同時期に比べ$10-20ドル／トン前後上昇して取引をスタートしています。１番刈の上級品の発生割合が少なかったことから、２番刈以降についても良品へ需要が集中し、産地相場は高値のまま堅調に推移することが懸念されます。
	【オレゴン州】　オレゴン州南部クラマスフォールズでは、１番刈の収穫作業はほぼ終了しています。６月下旬に軽い降雨があったため、多少雨当たり被害を受けている圃場も出ているようですが、概ね良品の発生が中心となっているようです。オレゴン州中部クリスマスバレーでは、６月下旬から１番刈の収穫を開始しています。今年はワシントン産アルファルファ１番刈の良品不足を受け、オレゴン州に多数の輸出業者が買付に入っており、昨年の同時期よりも価格は強含みで取引されているようです。
	【カリフォルニア州】　カリフォルニア州南部インペリアルバレーでは、現在４番刈まで収穫が進んでいます。産地の気温は上昇してきており、分析値は低下し、いわゆるサマーヘイと呼ばれる中級品以下の発生が中心となっています。産地相場については、分析値の低下に伴い、新穀開始当初と比較すると徐々に軟化してきています。カリフォルニア州北部では、断続的な降雨の影響で、ほとんどの１番刈は刈遅れ、もしくは雨当たりの被害を受けており、過去最悪レベルの品質と言われています。２番刈は間もなく終了する見込みです。２番刈も一部で降雨被害を受けているものの、品質については概ね例年並みのようです。
	【ネバダ州・ユタ州】　ネバダ州の主産地では1番刈は終了しており、2番刈が始まっています。1番刈は一部で良品は発生しているものの、降雨被害や、それを避けたための刈遅れ品などが多数発生しており、作柄は良好とは言えない状況です。ユタ州では、5月に記録的な大雨に見舞われましたが、6月上旬には天候は回復して順調に収穫作業が進みました。現在、すでに1番刈は終了しています。多くの圃場で、ほぼ降雨の被害を受けることなく良品が発生しています。
チモシー	【米国産】　１番刈の収穫は総じて順調に進んでおり、主産地であるコロンビアベースンおよびエレンズバーグでの収穫は終盤に差し掛かっています。産地の気温はチモシーの生育に非常に適しており、風も適度にあることから、刈り取り後の水分調整も長引かず、大多数の圃場が良い色目を保っており、今のところ殆どの圃場で上級品の発生が中心となっています。19年産が良品中心の作柄となったため、チモシーの新穀価格は18年産開始時に比べて全体的に軟化傾向にあります。このため、上級品と低級品の価格差が去年に比べると縮まる可能性があります。
	【カナダ産】　アルバータ州南部レスブリッジ地区では、これまでのところチモシーの生育状況は非常に良好です。現在のところ収穫作業は例年並みの７月初旬から開始される見込みです。アルバータ州中部クレモナ地区では、５月前半はレスブリッジ地区同様、冷涼な気候が続いていましたが、５月下旬から６月にかけては十分な降雨があり、現時点での生育状況は良好です。収穫作業は、今後の天候次第ではありますが、ほぼ例年並みの７月中旬前後から始まるものと予想されています。
スーダングラス	19年産のスーダンの収穫は例年に比べ７日から10日遅れ、５月下旬からスタートし６月に入ってから本格化しました。７月１日時点の作付面積は46,347エーカー（昨年同期比97%）となっています。作付面積は昨年同期比で微減となっていますが、18年産の繰越在庫も若干量あることから、供給力には問題はなさそうです。新穀相場については、各サプライヤーともまだ積極的な買付は行っておらず、市場は非常に静かな展開となっています。取引も少ないため、相場がまだ完全には立っていない状況です。
クレイングラス	クレインは全酪連の登録商標です。産地インペリアルバレーでは２番刈の収穫作業が中盤を迎えており、早い圃場ではすでに２番刈の収穫作業を終了しています。現時点まで天候に恵まれ、気温も例年より低く推移しており、湿度も高くないことから２番刈は色目も良く品質は全般良好と評価できます。日本からの引き合いは引き続き堅調に推移しています。韓国からの引き合いは良品については堅調なものの、米国産チモシー及びストローの価格軟化、加えて輸入割当枠の関係から良品以外のものへの需要は減退しています。
ストロー類	フェスクストローは7月上旬から収穫が開始される見込みで、早ければ7月下旬から出荷開始できる見込みです。ペレニアルライグラスの収穫は7月中旬から開始される見込みです。ペレニアルの作付面積は年々減少しており、産地価格への影響が懸念されます。
オーツヘイ	【豪州産】　2019年産の播種作業は豪州全域で終了しています。東豪州及び南豪州では播種後に十分な降雨があり、６月に入っても適度な降雨があったため、オーツの初期生育は順調に進捗しています。一方、播種作業前後で降雨が少ない状態が続いていた西豪州においても６月上旬以降ようやく降雨があり、現時点では順調な生育に入ったと言えます。産地相場については、昨年の旱魃の影響から、引き続き豪州国内からの引き合いが強く、深刻な旱魃に見舞われた東豪州では、特に堅調な需要が続いています。このため、産地相場自体は高止まりしている状況が続いています。輸出向けについては、産地側の供給力が低下してきていることに加え、北米産イネ科牧草の価格軟化を受け、オーツヘイの価格競争力が損なわれてきたことから、主要輸入国である日本及び韓国での需要は減退しつつあります。産地側では、在庫が限られている状況下ではあるものの、北米産の新穀価格の動向を見ながら輸出価格の調整に入りつつあり、一部のグレードで値下げを唱えるサプライヤーも出てきています。

人事異動

新	旧	氏名
■令和元年8月1日付異動発令		
総務部　人事室長	購買生産指導部　購買企画課長	飯島　洋一
購買生産指導部　購買企画課長	企画管理部　総合企画室課長	吉永　順一
酪農部　副部長 兼 酪農企画課長 兼 生乳共販課長	総務部　人事室長	岩本　仁志
酪農部　酪農企画課長代理	購買生産指導部　酪農生産指導室	貫井　裕美子
仙台支所　次長 兼 総務課長 兼 指導組織課長	福岡支所　次長 兼 総務課長	石本　文樹
仙台支所　酪農課長	(一社)Jミルク　(酪農部付出向)	近藤　宏
東京支所　総務課長	企画管理部　財務課長代理	薄井　康蔵
東京支所　北関東事務所長代理	東京支所　購買畜産課	木戸　康成
大阪支所　総務課長	北福岡工場　総務課長	千葉　敦之
大阪支所　業務課長	東京支所　北関東事務所長	大山　幸紀
福岡支所　総務課長	大阪支所　総務課長	松下　裕
北福岡工場長	酪農部　副部長 兼 酪農企画課長 兼 生乳共販課長	千田　稔
北福岡工場　総務課長代理	総務部　総務・広報課	牧之内　真智子
(一社)酪農ヘルパー全国協会 事務局次長　(総務部付出向)	北福岡工場長	岡本　尚之
(一社)Jミルク 広報グループ次長　(総務部付出向)	仙台支所　次長 兼 総務課長 兼 指導組織課長	中山　充
全国酪農飼料㈱ 鹿島工場 品質管理課長代理　(購買生産指導部付出向)	購買生産指導部　飼料製造課	八木　小百合
全国酪農飼料㈱ 九州支店長　(購買生産指導部付出向)	全国酪農飼料㈱ 鹿島工場　(購買生産指導部付出向)	勝又　剛
㈱日本ミルクリプレイサー 次長 兼 品質管理課長　(購買生産指導部付出向)	品質保証室長	松島　啓二
(一社)全国畜産配合飼料価格安定基金 事務局長　(購買生産指導部付出向)	東京支所　総務課長	中嶋　仁
■令和元年8月1日付昇進発令		
品質保証室長	品質保証室　課長	丸山　惣太郎
仙台支所　北東北事務所長	仙台支所　北東北事務所長代理	山中　新
東京支所　購買畜産課長	東京支所　購買畜産課長代理	岩崎　正孝
東京支所　購買畜産課 畜産リー	東京支所　購買畜産課長代理	髙岩　秀典
全国酪農飼料㈱ 鹿島工場 製造課長　(購買生産指導部付出向)	全国酪農飼料㈱ 鹿島工場 製造課長代理　(購買生産指導部付出向)	山辺　大剛
■令和元年8月1日付兼務(兼務解除)発令		
仙台支所長 兼 三戸食肉事業所長	仙台支所長 兼 酪農課長 兼 三戸食肉事業所長	白鳥　建樹
仙台支所　次長 兼 購買畜産課長	仙台支所　次長 兼 購買畜産課長 兼 北東北事務所長	蒲田　泰介
東京支所　次長 兼 北関東事務所長	東京支所　次長 兼 購買畜産課長	渡邉　和典
大阪支所　購買畜産課長	大阪支所　購買畜産課長 兼 業務課長	下井　泰隆
北福岡工場　次長 兼 原料課長 兼 総務課	北福岡工場　次長 兼 原料課長	金野　渉
全国酪農飼料㈱ 常務取締役 兼 業務部長　(購買生産指導部付出向)	全国酪農飼料㈱ 常務取締役 兼 業務部長 兼 九州支店長　(購買生産指導部付出向)	都倉　雅弘

INFORMATION

北海道 乳牛産地情報

令和元年８月１日現在

札幌支所　TEL 011-241-0765
釧路事務所　TEL 0154-52-1232
帯広事務所　TEL 0155-37-6051
道北事務所　TEL 01654-2-2368

価格状況 ↑……強含み ↗……やや強含み →……横這い ↘……やや弱含み ↓……弱含み

事務所	畜種	相場(万円)	価格状況	管内状況
札幌管内	育成牛(10-12月令)	40～45	→	札幌管内の７月中旬までの生乳生産量前年比は、函館管内月計で96.9%、累計で96.5%、苫小牧管内月計で96.5%、累計で96.9%の実績となっております。８月の初妊牛動向といたしまして、10月分娩が中心となります。７月管内乳牛市場がやや弱含みで推移しましたが、８月導入は秋分娩となってくることから、庭先購買価格は横這いで推移するものと思われます。腹別の出回り頭数はF1腹と雌雄選別腹が一定数確保できるものと思われます。この地域は高能力牛が出てくる地域ですので、ご希望がございましたらお問合せください。育成牛、経産牛の価格につきましても、初妊牛同様に横這いで推移するものと思われます。
	初妊牛	70～78	→	
	経産牛	45～50	→	
釧路管内	育成牛(10-12月令)	45～55	↘	根釧管内の７月中旬までの生乳生産量前年比は、釧路管内月計で99.4%、累計で99.0%、中標津管内月計で101.6%、累計で100.8%の実績となっております。８月の初妊牛動向といたしまして、10～11月分娩が中心となります。７月管内乳牛市場の相場は道内規模拡大農家の導入や、秋口以降の相場上昇を予想した購買客の駆け込み需要もあり、強含みの結果となりました。８月導入は秋分娩へと移行いたしますので、庭先購買価格も強含みで推移するものと思われます。資源状況につきましては、例年並みの頭数は確保出来る状況となっておりますが、夏季放牧をしている牛も多い為、早めのご注文をお願い申し上げます。
	初妊牛	75～85	↑	
	経産牛	50～60	→	
帯広管内	育成牛(10-12月令)	42～52	↘	帯広管内の７月中旬までの生乳生産量前年比は、帯広管内月計で103.9%、累計で103.4%の実績となっております。８月の初妊牛動向といたしまして、10月～11月前半分娩が中心となります。７月管内乳牛市場が強含みで推移しましたので、秋分娩腹が中心となる８月の庭先購買価格も強含みで推移するものと思われます。腹別でみると、F1腹は堅調、雌雄選別腹はやや軟調、和牛受精卵移植腹は受精卵のランクにより価格差が大きくなっています。初妊牛に引っ張られ、二産目の経産牛などはやや強含みで推移するものと思われます。今後、道内生産者の購買の動きも活発になってくる可能性もありますので、相場等をお問合せの上、早めのご注文をお願いします。
	初妊牛	75～85	↑	
	経産牛	50～60	↗	
道北管内	育成牛(10-12月令)	43～53	→	道北管内の７月中旬までの生乳生産量前年比は、稚内管内月計で98.4%、累計で98.3%、北見管内では月計で100.3%、累計で101.6%の実績となっております。８月の初妊牛動向といたしまして、10～11月分娩が中心となります。７月管内乳牛市場は上場牛が夏分娩後半となったことから、道内外の購買客も増加し、価格はやや強含みの展開となりました。今後は道内の規模拡大農家の導入が増えること、秋分娩となり購買客が増えてくることから市場価格はやや強含みでの展開が予想されます。庭先購買価格についても同様に推移すると思われます。資源状況と致しましては、初妊牛ではF1腹、雌雄選別腹共に確保し易い状況は続いており、経産牛についても比較的確保がし易い状況となっております。
	初妊牛	70～80	↗	
	経産牛	48～55	→	
道内総括	育成牛(10-12月令)	43～53	↘	道内の７月中旬までの生乳生産量前年比は101.3%、累計で101.0%の実績となっております。１番牧草の収穫もほぼ終了し、一部管内では干ばつの影響を受け収量減ですが、おおむね順調に収穫が出来ている様子です。８月の初妊牛動向といたしまして、10～11月分娩中心となり、夏分娩回避のため一時相場が下がった６月、７月からはある程度、値が戻ることが予想されます。道内外の規模拡大農家、ギガファームの導入需要が回復し、庭先購買価格も強含みで推移するものと思われます。資源については、各管内で例年並みに確保できる状況です。弊会としては引き続き庭先選畜を中心とした購買を行ってまいりますので、導入希望・計画がございましたらお早目のご注文宜しくお願い致します。
	初妊牛	75～85	↑	
	経産牛	50～60	↗	

今月の表紙

今月の表紙は、「第10回酪農いきいきフォトコンテスト」（第48回全国大会にて開催）で応募頂いた特選の作品「私の大きな友達」（群馬県 山川靖彦氏 撮影）です。

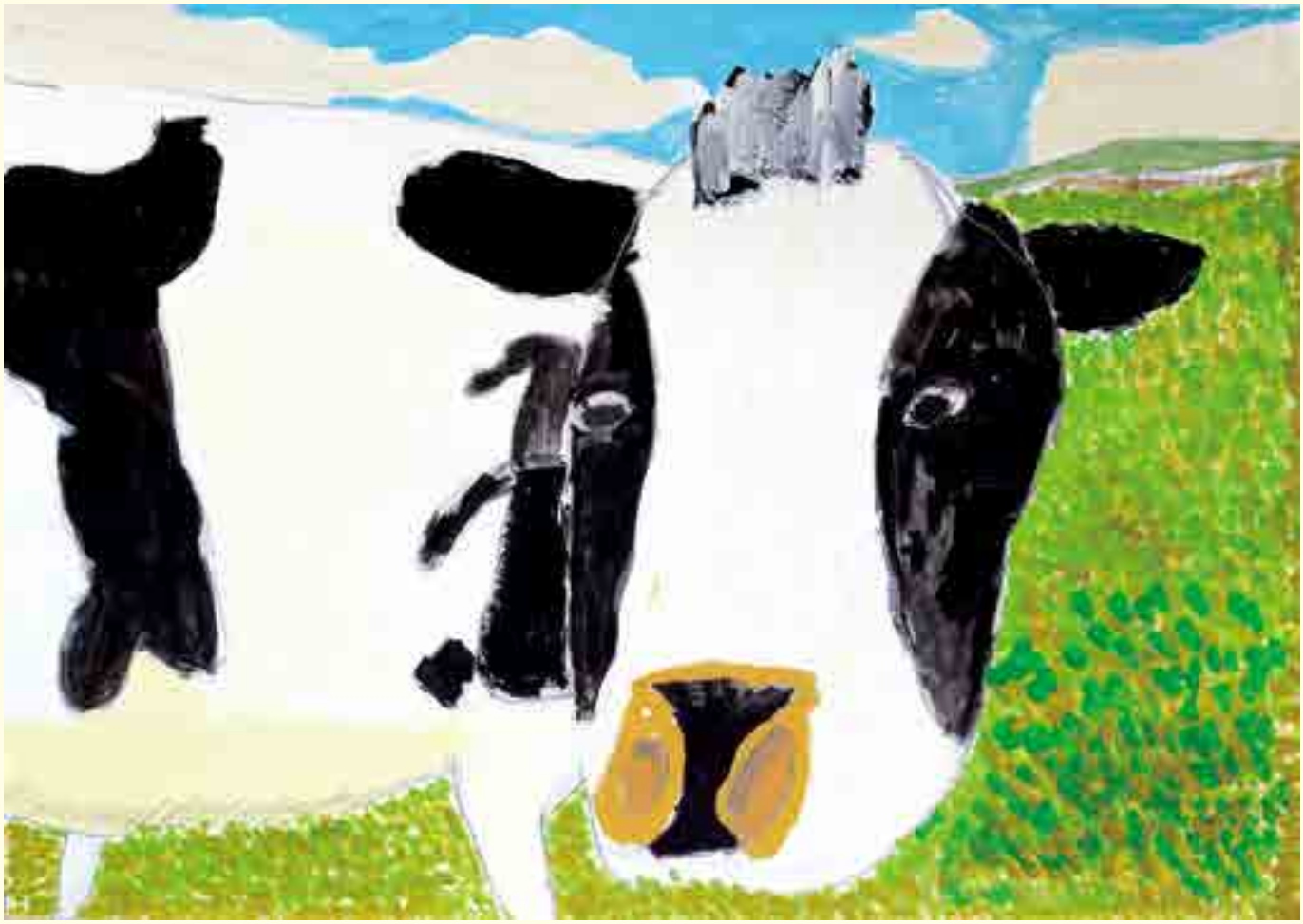
編集後記

●ようやく梅雨が明け、夏らしい暑さがやってきました。
夏バテ予防のためにも、スタミナをつけておきたいところです。

●会報に関するご意見・ご要望等があれば、以下のアドレスにメールをいただければ幸いです。
shidoukikaku@zenrakuren.or.jp

令和元年8月10日発行（毎月1回10日発行）
全酪連会報　8月号　No.647
●編集・発行人　戸辺誠司
●発行　全国酪農業協同組合連合会
〒151-0053　東京都渋谷区代々木一丁目37番２号 酪農会館
TEL 03-5931-8003　http://www.zenrakuren.or.jp/

今月の らくのう こどもギャラリー 入賞作品紹介



ぼくじょうのうし
那須塩原市立青木小学校（関甲信）5年　平山 はると

今月の入賞作品は…
那須塩原市立青木小学校（関甲信）5年の平山 はるとさんの作品です。
広い牧場でのんびりリラックスしている牛さんの様子がよく描かれています。愛嬌のある表情が魅力的ですね。鉛筆と水彩絵具を巧みに使っています。つぶらな瞳や生い茂る牧草の表現に工夫が見られます。はるとくんの牛さんに対する優しい眼差しが感じられる素晴らしい作品です。

※この作品は本会と全国酪農青年女性会議共催の「第46回らくのうこどもギャラリー」で全国683点の応募作品から入賞12点に選ばれたものです。

主催　全国酪農青年女性会議